

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(B)（一般）

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02384

研究課題名（和文）近現代日本における病者・療養者の生 現場での実践、現場からの思索

研究課題名（英文）Infected and Living in Sanatoriums People's Way of Life in Modern Japan:
Practice on the Field, Contemplation from the Field

研究代表者

石居 人也 (ISHII, Hitonari)

一橋大学・大学院社会学研究科・教授

研究者番号：20635776

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 5,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、国立療養所大島青松園・沖縄愛楽園などで史料調査や聞きとりをおこない、療養所という現場で、現場から、療養者の生をめぐる歴史と現在について考察した。

おもな成果は、大島に残る写真や図書を子細に分析し、新設の社会交流会館の歴史展示と図書室に研究成果をフィードバックするとともに、沖縄での共同研究では、病身で沖縄にわたって病者のコミュニティを築いた青木恵哉と草創期愛楽園の歴史像を再考した。また、学芸員や研究者との議論によって、現場での展示表現や現場からの歴史叙述の可能性と課題を探り、covid-19を念頭におきつつ、伝染病や感染症とむきあう人や社会のあり方を歴史的に問いなおした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、従来のハンセン病をめぐる歴史研究のなかでは、抑圧や人権侵害といった「大きな物語」の前で見過ごされ、あるいは描き漏らされがちだった、病者・療養者の生の多面的ないし多様なありようをみつめ、描くことで、隔離・療養をめぐる歴史と現在とをとらえなおした点にある。

社会的意義は、国立療養所大島青松園内に新設された「史跡めぐり」パネルや社会交流会館の展示室・図書室の整備に、調査・研究の成果をフィードバックし、現場における史料の展示や活用のあり方、療養所の歴史と現在を考える機会のつくり方などを検討した点にある。また、現場から離れた東京での市民講座などでも、調査・研究の成果を発信した。

研究成果の概要（英文）：In this research, we surveyed historical materials and conducted interviews at the National Sanatorium Oshimaseishoen and Okinawa Airakuen, and contemplated the history and present on living in sanatoriums people's way of life. The main results of this research were (1) detailed analysis of the photographs and books being left in Oshima, and (2) feedback on the research results to the historical exhibition and the library in the Oshima Memorial Museum. (3) In the joint research, we re-contemplated the historical image of Airakuen in the early days and Keisai Aoki, who infected but went to Okinawa and built a community of infected people. In addition, (4) we explored the possibilities and issues in exhibition expressions on the field and historical narratives from the field through discussions with curators and researchers, and (5) keeping covid-19 in mind, we historically contemplated the people and society that faced infectious diseases.

研究分野：日本史

キーワード：日本史 近現代史 ハンセン病 隔離 療養 生 伝染病/感染症 covid-19

1. 研究開始当初の背景

(1) 近現代日本のハンセン病(癩)をめぐる歴史研究は、従来、100年ちかくに及んだ隔離政策の実態とその問題性を明らかにすることに注力してきた。そこでは、すべての病者を終生、強制的に隔離するもの(絶対隔離)と隔離政策を評したうえで、抑圧され、それに抗してたたかう主体として病者・療養者が描かれた。この構図は、研究開始当初はもちろん、現在にいたってもなお、ハンセン病問題を語る際の「型」のひとつとして、大きな影響力を有している。

一方、個々の病者・療養者や地域社会に着目すれば、隔離政策が、「絶対」という表現から想起されるイメージとはかならずしも合致しない面をもっていたことも明らかになりつつあった。病者の集住地域を支えるキリスト教団、療養所外で病者に医薬を供する医療・研究施設などの、療養所外で生きる病者を支える仕組みについての研究、史料にもとづいて療養者の生の具体相に迫ろうとする研究などは、新たな歴史研究の動向を示すものといえよう。また、聞きとりを方法とした研究や、療養者の自己表現という切り口を用いた研究など、療養者の生へのアプローチも多様化の兆しをみせていた。

(2) 研究開始当初の段階で、研究代表者と分担者は、国立療養所大島青松園(香川県高松市)や国立療養所沖縄愛楽園(沖縄県名護市)での調査・研究の実績を有していた。

大島では、1914年に療養者が結成したキリスト教信徒団体「霊交会」の教会堂、1931年に発足した療養者の自治組織「協和会」の事務所、文化会館などで、すでに調査をおこなっていた。では、霊交会の逐次刊行物『霊交』(1910年代~1940年)の大半が存することを確認し、刊行物の交換や礼拝などをとおして、療養者が戦前から療養所外との交流をもっていたことを明らかにした。では、自治組織が草創期からつけている日誌や、自治関係史料・逐次刊行物『報知大島』(1932年~1941年)・写真などがみつき、霊交会と自治・文化活動の中心的な担い手がかさなっていた様子を明らかにした。では、協和会が受贈・購入した書籍、療養所内の文芸投稿誌『藻汐草』(1932年~1944年)と、その休刊後、戦時下に手稿を綴じて「刊行」された手書き・手づくり誌「青松」などがみつき、読むこと、書くことが療養者にもった意味を明らかにした。

沖縄では、愛楽園の基礎を築いたともいわれる、徳島県出身の青木恵哉の足跡をたどり、史料調査をかさねることで、沖縄にわたって以降も、青木が大島とのつながりをもっていたことを明らかにした。2015年6月には、青木の自伝的著作『選ばれた島』のリプリント刊行の監修と解説を担い、2016年3月には、シンポジウム「青木恵哉~愛楽園の礎となった療養者~」を企画・開催した(主催は沖縄愛楽園自治会)。

これらは、現場での見聞や所感を咀嚼し、時には齟齬をきたす見聞と史料、見聞と見聞などをつきあわせて検証し、そのあいだの齟齬、換言すれば多面性にこめられた意味をも含めて考える作業だった。そのなかで、あらためて、療養所において、あるいは療養所から、病者・療養者の生を考え、療養所という現場がもつ意味を問い、現場性を活かした発信のあり方を模索し、あわせて療養所の将来をみすえた史料の保存・管理・活用を検討することが不可欠だと考えるにいたった。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、主として20世紀日本のハンセン病の病者や療養者(療養所で生きる病者・回復者)の生について、隔離・療養の現場となった療養所において、あるいは療養所から、考えることを目的とする。療養所にくり返し足を運び、史料を繙き、療養者と対話するなかでみえてくる、かれらの多様な生をとらえるとともに、それをも含んで隔離が成り立っていたことに留意して、個人や社会の病との向きあい方について問いなおす。具体的には、国立療養所大島青松園と国立療養所沖縄愛楽園をおもなフィールドとして、病者・療養者の生を跡づけ、その歴史の意味を考察する。あわせて、史料の適切な保存・管理・活用と、現場で、現場から考える実践のあり方を検討・実施する。

(2) それぞれのフィールドに即した研究目的は、おもに以下のとおりである。

大島に残る史料の傾向や特徴を把握し、史料のまとまりとしての意味を考えるとともに、個々の史料にわけいって分析をかさね、療養者の生を、かれらを取りまく環境との交点において明らかにする。あわせて、将来を見据えて史料を適切に保存・活用する手だてを講じる。

大島に残る史料群のうち、とりわけ、霊交会の教会堂と協和会の事務所とに残る写真、および文化会館に残る書籍の調査に注力する。前者は、裏書きなどを手がかりにしなが聞きとりをおこなうことで、写真を史料として活かし、後者は療養者の自治組織が、その草創期から近年にいたるまで、受贈・購入した書籍を調査・整理することで、書籍を史料として活用する道をひらく。以上をとおして、療養者の生のありようを立体的に明らかにする。

大島において、聞き手と語り手を固定せず、療養者や市民を含む人びとがひとつの場を共有し、一定の素材や話題にもとづいて自由に対話する「話のアトリエ」を実施する。そのうえで、対話の内容を記録することで、一対一の聞きとりとは異なる角度から療養者の生にせまる。

大島を訪れた人びとが、現場で、現場から考えるきっかけとなるような、大島の歴史と現在を知り、考えるためのツールを作成する。これにより、現場性を開くことをめざす。

沖縄愛楽園に残る青木恵哉に関する史料を、大島との関係に着目しつつ分析する。これにより、大島を起点として移動をかさね、沖縄へとたどり着いた青木にとって大島がもった意味と、大島の療養者、とりわけ霊交会の会員たちにとって青木がもった意味とを明らかにする。

書籍はもちろん、展示・映像作品・報道などにおいて、病者・療養者の生や療養所がどのように表象されているのかを検証し、現場で、現場から考える方法や実践について問いなおす。

全国の療養所において、調査・研究を続けている研究者や学芸員と情報共有・意見交換をおこなう研究会やワークショップを開催し、現場で、現場から考えるとどのような意味をもつのか、その課題や可能性について議論する。

以上によって、隔離政策のもとにあった病者・療養者の生のありようを、いたずらに単純化することなくとらえ、その多面性をもつ意味を問うことを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 本研究のおもなフィールドである国立療養所大島青松園や国立療養所沖縄愛楽園はもちろん、国立ハンセン病資料館・国立療養所長島愛生園・国立国会図書館などに関する調査は、極力現地において、可能なかぎり共同でおこない、調査の成果のまとめや分析は、研究代表者・分担者がそれぞれの研究室など任意の場所でおこなった。また、調査・研究に関する打ちあわせや調査・研究の成果に関する情報共有や議論は、対面あるいはオンラインミーティングツールを用いておこなった。

(2) 史料の調査・研究は、以下のような方法で実施した。史料の発見段階での状態(原状)の記録(静止画)、史料群の全体像の把握と調査方針・手順の決定、史料のデジタル撮影(静止画)、史料の内容把握とデータベース化(目録作成)、調査成果の活字ないし電子媒体での公表、史料の分析、研究成果の活字ないし電子媒体での公表。

(3) 「話のアトリエ」は、以下のような方法で実施した。開催概要を決定のうえ療養所の内外へ告知、導入に用いる素材(映像・写真など)を用いて話題提供し、参加者(療養者・市民)の対話を促すとともに、対話に参加、対話の様子とその内容を記録(動画・静止画・音声)、対話の様子・内容と分析結果を活字ないし電子媒体で公表。

(4) 療養者や療養所を知り、考えるためのツールの作成と史料の保存・活用の検討は、以下のような方法で実施した。協和会との打ちあわせ、必要なツールの検討と作成するツールの決定、必要な史資料の収集、ツールの作成、以上の成果と課題をふまえて、史料の保存・活用の具体的なあり方を構想。

(5) 現場について考える研究会・ワークショップは、以下のような方法で開催した。現場とむきあいながら調査・研究を続けている研究者や学芸員に協力を要請、開催概要を決定のうえ告知、研究会・ワークショップを実施、その様子やそこでの知見をふまえた考察を、活字ないし電子媒体で公表。

4. 研究成果

(1) 国立療養所大島青松園の協和会事務室・キリスト教霊交会教会堂・文化会館に残る史料の調査・整理を進めた。とりわけ協和会事務室と霊交会教会堂に大量に残されていた写真の調査・分析と、文化会館に残されていた2万点を超える、自治組織の草創期以来の受贈・購入書籍の調査・整理に注力した。前者に関しては、写真の裏書きに丹念にあたり、関連する史料や情報とのつきあわせをおこなったうえで、療養者に写真を用いながら聞きとりをおこなうことで、写真の被写体や撮影時期・場所などを特定した。これにより、史料としての写真の活用可能性や精度が高まったとともに、調査の過程で、大島や療養者の生に関わるさまざまな歴史が、1枚の写真の力でひきだしうるということが明らかになった。後者に関しては、書籍の多くに、蔵書印や蔵書票がみられ、当該書籍が、いつ、誰によって、大島にもたらされたのかが明らかになった。これにより、どのような本が大島にもたらされ、読まれたのかはもちろん、協和会が療養所外のどのような人や団体とのつながりをもっていたのか、換言すれば、療養者の生が、療養所をとりまくどのようなつながりのなかにあったのかを、長いスパンで考える手がかりを得ることができた。調査・整理は膨大な作業であり、また covid-19 感染拡大の影響から療養所への立ち入りが制限され、現地での作業が叶わないという事情もあって時間を要しているが、最終的には、書籍を史料として用いるためのデータベース(目録)を完成し、公開するべく、作業を鋭意継続している。

(2) 本研究課題に着手するのと前後して、国立療養所大島青松園では、療養所内外の人の交流の拠点とすることを目的に、2019年4月に社会交流会館をオープンさせることが決まり、そこには、展示室や図書室がもうけられることとなった。研究代表者と分担者は、設置主体である協和会に協力するかたちで、おもに図書室(代表者)と展示室(分担者)の開室準備に携わった。また、この事業そのものが、療養所という現場における史料の展示や活用のあり方を考えることとわかちがたく結びついており、従来かさねてきた調査・研究や議論の成果を、同館の歴史展示に活かすとともに、同館図書室の配架・公開方針の検討、蔵書(文化会館より移管)の来歴と性格にスポットをあてた小展示を設けるなど、これまでかさねてきた調査・研究の成果の一端を、同館の事業をとおして現場からフィードバックすることができた。

(3) 大島を訪れた人びとが、大島の歴史に現場で触れる糸口となるよう、2017年度に協和会が主体となって島内各所に設置した「史跡めぐり」の解説パネルの作成にも携わる機会を得た。解説執筆にあたっては(1)の蓄積が重要な意味をもち、それをふまえてさらに正確かつ簡潔な情報を提示できるように、情報の精査をかさねることとなった。またあわせて、1枚のパネルに凝縮された情報の背後にひろがる膨大な大島の歴史を、根拠となる史料やレファレンス情報とともに活字ないし電子媒体で示すことで、検証や蓄積を可能にし、主体的な学びや研究の進展につながる環境整備を進めた。

(4) 徳島県出身の病者で、大島や回春病院(熊本県)を経て、療養所のなかった沖縄へ1927年にわたり、同病者に手をさしのべ、病者のコミュニティを築いて、沖縄愛楽園の前身を設けた、青木恵哉と沖縄愛楽園の草創期について考える共同研究プロジェクトを進めた。このプロジェクトは、2016年に沖縄愛楽園交流会館の主催でおこなわれたシンポジウム「青木恵哉～愛楽園の礎となった療養者～」をきっかけにはじまったもので、沖縄愛楽園の自治会長や交流会館学芸員などとともに、論集の刊行を目指して、交流会館で定期的に研究会を開催しながら議論を深めてきた。刊行にむけた追いこみに入ったところで covid-19 の感染拡大に直面し、対面での研究会開催が難しくなったため、オンラインで個々の執筆者と意見交換をおこなう方針に切り替え、ていねいに議論をかさねながら、完成にむけて着実に歩を進めている。

(5) 現場における展示表現や現場の歴史を描くことの可能性と課題について考えるべく、全国の療養所で整備が進む展示施設(多くは、社会交流会館や交流会館を名乗っている)の学芸員や、療養所をフィールドに研究を続けている研究者と議論する研究会やワークショップを開催し、実践的かつ率直な議論をかさねた。また、ハンセン病のみならず、現場での展示表現にかかわる模索を続けている、水俣病をめぐる複数の展示施設を調査し、水俣病をめぐる近年の議論をふまえながら分析した。こうしたとり組みをとおして、より広い文脈においてハンセン病や隔離や療養所をとらえる視座を得ることができた。

(6) covid-19 の感染拡大とそれが社会に何をもたらしたのかを考えることは、本研究のテーマとも密接に関わっている。それゆえ、歴史と現在とを往還しつつ、単純な歴史の参照でも、過去との差異のいたずらな強調でもないかたちで、「コロナ禍」なるものの歴史性を考察し、現状を念頭におきながら、伝染病や感染症とむきあう人や社会のありようを問いなおす研究を進め、その成果を公表した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計29件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 297
2. 論文標題 ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる（2） 「人気俳優」と「社会社説担当」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部 Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 阿部安成	4. 巻 424
2. 論文標題 ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる（3） 「おひい様と呼ばれ」たひと井伊文子	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 100-110
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石居人也	4. 巻 20
2. 論文標題 歴史を訪い、歴史から問う 「コロナ禍」なるものを検証するために	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アーカイブ通信	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 石居人也	4. 巻 1007
2. 論文標題 「いきる」ための知・実践における「科学」 近代日本の「癪」をめぐる	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 歴史学研究	6. 最初と最後の頁 104-112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 288
2. 論文標題 意にそわない 療養所の歴史を縁どる、過去との綾取り	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部 Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 16-1
2. 論文標題 造物である詩誌 ハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園での詠歌の結びあいを記録する	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立大学法人滋賀大学研究推進機構環境総合研究センター研究年報	6. 最初と最後の頁 61-76
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 292
2. 論文標題 後続世代からみた牧原民衆史について	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部 Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 53
2. 論文標題 切片を集めて ハンセン病をめぐる療養所の史料論へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部附属史料館研究紀要	6. 最初と最後の頁 31-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 295
2. 論文標題 ハンセン病をめぐる療養所を、訪う、知る、報せる(1) 「沖縄のらい者の父」青木恵哉	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部 Working Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石居人也	4. 巻 下
2. 論文標題 ハンセン病患者・療養者の隔離をめぐる「尊厳」 近現代の日本社会における	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 尊厳と社会(加藤泰史・小島毅編、法政大学出版局)	6. 最初と最後の頁 31-57
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 416
2. 論文標題 研究ノート 展示の刹 ハンセン病をめぐる国立療養所園内施設の現在	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 4-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 416
2. 論文標題 資料紹介 国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(1)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 72-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 417
2. 論文標題 資料紹介 国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(2)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 118-132
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 25
2. 論文標題 資料紹介 国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(3)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部研究年報	6. 最初と最後の頁 127-155
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 418
2. 論文標題 資料紹介 国立療養所大島青松園史跡めぐりと史料(4完)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 彦根論叢	6. 最初と最後の頁 146-161
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 699
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (53)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 36-39
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 700
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (54)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 32-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 701
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (55)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 20-24
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 702
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (56)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 34-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 703
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (57)	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 36-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 52
2. 論文標題 研究ノート ハンセン病をめぐる史料の見落としと目配り 国立療養所大島青松園をフィールドとした史料論にむけて	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 研究紀要(滋賀大学経済学部附属史料館)	6. 最初と最後の頁 85-100
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 6
2. 論文標題 論文 書史を伝えること、書史から考えること 国立療養所大島青松園で蔵書目録をつくる	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 国立ハンセン病資料館研究紀要	6. 最初と最後の頁 17-42
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 704
2. 論文標題 療養所の歴史を縁どる 過去との綾取り (58)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 青松	6. 最初と最後の頁 44-56
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石居人也	4. 巻 237
2. 論文標題 「攻囲」されつつ「攻囲」するからだへの問い	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本教育史往来	6. 最初と最後の頁 3-5
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 267
2. 論文標題 読点、ひとつ 『大島青松園で生きたハンセン病回復者の人生の語り』を読む	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部 Workin Paper Series	6. 最初と最後の頁 1-60
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 14-1
2. 論文標題 資料紹介 シリーズ『青松』を読む 手づくりを一年 国立療養所大島青松園関係史料の保存と公開と活用にむけて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 滋賀大学環境総合研究センター研究年報	6. 最初と最後の頁 73-84
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 24
2. 論文標題 研究ノート 「具体的なイメージにふれるこの機会を、実際に各館を訪れてみるきっかけに」という企画 国立ハンセン病資料館2017年度春季企画展「ハンセン病博物館へようこそ」と同展付帯事業「ハンセン病博物館へようこそ」各館活動報告会に寄せたノート	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部研究年報	6. 最初と最後の頁 75-97
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 阿部安成	4. 巻 24
2. 論文標題 資料紹介 きりとる 国立療養所大島青松園キリスト教霊交会の写真	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 滋賀大学経済学部研究年報	6. 最初と最後の頁 99-115
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石居人也	4. 巻
2. 論文標題 「現場」から組み立てる歴史学	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 歴史学研究会編『第4次 現代歴史学の成果と課題 第3巻 歴史実践の現在』績文堂出版（図書所収論文）	6. 最初と最後の頁 239-249
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 「いきる」ための知・実践における「科学」 近代日本の「癩」をめぐって
3. 学会等名 歴史学研究会 2020年度大会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 東京西郊地域の近代 19～20世紀転換期都市の空間編成と医療・衛生施設の郊外化
3. 学会等名 日韓歴史共同研究シンポジウム2018（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 コメント 攻囲される子どものからだ 帝国日本の「衛生」問題
3. 学会等名 第37回日本教育史研究会サマーセミナー（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 明治を生きた人びとの生・病・死 歴史学者がみる明治の光と影
3. 学会等名 洋楽文化史研究会第97回例会シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 石居人也
2. 発表標題 ディスカッサント 墓地の発明から火葬の勝利へ フランスにおける死の変容（18-21世紀）
3. 学会等名 日仏会館・フランス国立日本研究所講演会（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 歴史学研究会編	4. 発行年 2020年
2. 出版社 績文堂出版	5. 総ページ数 171
3. 書名 『コロナの時代の歴史学』（共著）中「衛生」と「自治」が交わる場所で 「コロナ禍」なるものの歴史性を考える」（石居人也）	

1. 著者名 阿部安成	4. 発行年 2019年
2. 出版社 滋賀大学経済学部	5. 総ページ数 260
3. 書名 大島ユリイカ ハンセン病をめぐる国立療養所大島青松園の歴史表象	

1. 著者名 阿部安成	4. 発行年 2018年
2. 出版社 滋賀大学経済学部	5. 総ページ数 287
3. 書名 島の野帖から ハンセン病の療養所がある島でのフィールドワークから歴史を縁どる試み	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	阿部 安成 (ABE Yasunari) (10272775)	滋賀大学・経済学部・教授 (14201)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------